FUEKI 不易
vol.50

地域の可能性

［特集1］瀬戸内国際芸術祭2013春シーズン開幕！　［特集2］フォーラムvol.2「暮らしているからこそ見える、可能性」

瀬戸内国際芸術祭2013 春シーズン開幕！

―芸術祭が開く瀬戸内の可能性―

Photo by ; Daisuke Aochi

前回2010から更にパワーアップした瀬戸内国際芸術祭2013が始まりました。会期は瀬戸内海の四季を楽しめるよう3シーズン、延べ108日間、新たにエリアを中西讃の沙弥島、本島、高見島、粟島、伊吹島を加え、12の島と高松港、宇野港が会場となります。23の国と地域から約210組のアーティスト約200点の作品が参加します。
今回は春・夏・秋の3シーズンの開幕です。アートと島をゆっくり巡りながら瀬戸内という素晴らしい地域資源を再認識していただきたいと願っています。

Photo by ; Keita Sugiura

▼おもてなしの心でお出迎え、賑わう港町・宇野

岡山側から島への玄関口となる宇野港周辺では、「音と写真の町」「連絡船の町」をテーマにこの町の記憶を呼び起こします。淀川テクニックの「宇野のチヌ」に加え、写真家・荒木経惟（アラーキー）は、新作となる巨大な「ꟼARADISE」写真を建物の壁面に登場させるビルボードの設置やJR宇野線の電車で中吊りに作品を展示、旧大日本帝国海軍の船で使われていたいかりや、ノルウェー船のスクリューをアート化する小沢敦志の「船底の記憶」、白石美穂が手掛けた「Una」は、山脈を連想させるカラフルなとんがりテントやドラム型の屋上ステージの外装とイベントホールでのライブパフォーマンス、イギリス出身のミュージシャン、デイヴィッド・シルヴィアンのサウンド・インスタレーション「abandon / hope」など大物アーティストが参加し、多くの作品が楽しめます。

また、人と情報が集まる拠点となることを目指して、案内所やカフェなどのプラットホームを設置し、島々への旅を盛り上げる場所となります。市民、市職員有志らで結成したボランティア団体「たまの☆おもてなし隊」（約100名）は、全国からやって来る方々との交流を図りつつ、港では島に渡る人々、旅を終えた人々を温かくおもてなししてくれます。

▼ベネッセアートサイト直島の原点－国吉康雄展開催中

ベネッセハウスミュージアムでは、3月20日～ 6月9日までの82日間（無休）、福武コレクションを一挙公開・展示する「国吉康雄展」を開催しています。全館を使用した展覧会では、油彩、版画、ドローイング、写真などの国吉作品と遺品を時代順に鑑賞することができます。

3月23日のオープニングでは「この展覧会では、国吉の絵と対話しながら、作品が発するメッセージを感じ、彼の人生を知ってもらって、今という時代に照らして自分の生き方を考える、そのような体験をしていただきたい。」と、福武總一郎理事長からあいさつがありました。

直島で初めて開催される国吉康雄の展覧会を、現代アートと共に鑑賞していただければと思います。

国吉康雄は、1889年（明治22年）、岡山市の出石町で生まれ、17歳で単身渡米し、働きながら美術を学び、20世紀前半のアメリカで活躍した日本人画家です。1929年（昭和4年）には、ニューヨーク近代美術館（MOMA）による「19人の現代アメリカ画家」に選ばれました。しかし第二次世界大戦中に敵性外国人として活動を制限され、望んでいたアメリカ市民権を得られないまま1953年（昭和28年）に亡くなりました。激動の時代に流されることなく、自らの信念を貫いた国吉の作品からは多くのことを考えさせられます。

▼新たな展開を見せる犬島「家プロジェクト」

犬島では、ルーブル美術館別館を手掛けた建築家・妹島和世設計の「家プロジェクト」が2棟増えて5棟になります。現在の3棟「F邸」「S邸」「I邸」に、透明アクリルを構造体とした360度円形に拡がるギャラリー「A邸」と、築200年の古民家の梁を残してリノベーションした「C邸」が加わります。作品も一新され、アーティスト5名が新作を発表します。その中の一つF邸では、ガラスビーズや発泡ウレタン作品などで今もっとも注目されている若手アーティスト、名和晃平の作品が鑑賞できます。

Photo by ; Daisuke Aochi

開催期間：

春｜3月20日（春分の日）－4月21日（日）33日間
夏｜7月20日（土）－9月1日（日）44日間
秋｜10月5日（土）－11月4日（月・休）31日間

会場：

2010年開催エリア｜
直島、豊島、女木島、男木島、小豆島、大島、犬島、高松港・宇野港周辺
新規参加エリア｜
中西讃の島々（沙弥島［春］・本島［秋］・高見島［秋］・粟島［秋］・伊吹島［夏］）

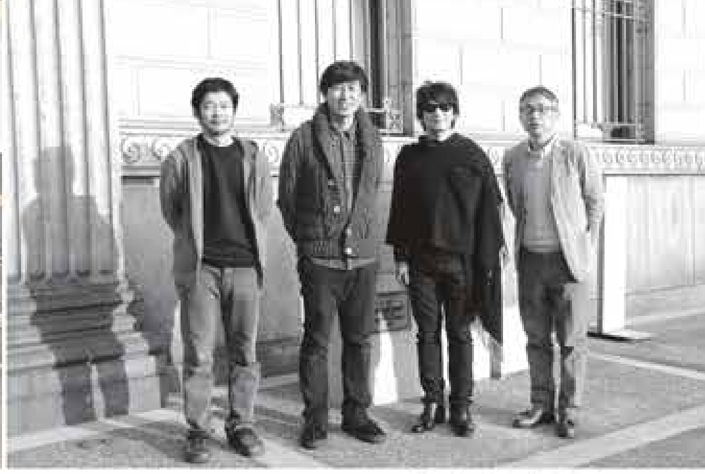

Photo by ; Sonoko Tanaka

特集2　福武教育文化振興財団フォーラムvol.02

「ここに生きる、ここで創る」―生活と文化、そして地域の未来―

福武教育文化振興財団では、地域づくりについてみんなで考える場として「ここに生きる、ここで創る」フォーラムを開催しています。今回は岡山県北に暮らしながら、国内外へ活動を発信している30代の若者たち、杉浦慶太氏（写真作家）、山崎樹一郎氏（シネマニワ代表）、井筒耕平氏（美作市地域おこし協力隊）に「暮らしているからこそ見える、可能性」についてそれぞれの想いを語っていただきました。（3月2日ルネスホールにて）

トークセッション「暮らしているからこそ見える、可能性」

杉浦慶太 × 山崎樹一郎 × 井筒耕平　コーディネーター／山川隆之

▼Uターン、Iターンの彼らが、なぜ「ここ」を選んだのか

杉浦――大学を卒業し、東京で若い人ばかりが集まる写真スタジオに3年ぐらい勤めた。そこからワンステップ上がるためには、誰かのカメラアシスタントになるか、どこかの大きなスタジオに入って専属カメラマンになるかという、カメラマンとしての選択が2つあった。ちょうどその時に自分の家が商売をしていたが、経営が危うくてたちゆかなくなって、私が長男だったので帰るしかなかろうと腹を決めた。

その裏にはもう一つ理由があり、このままでは写真作家として通用しないなと。現代美術という一種の箱庭的な世界の中でさえ、自分の持っている経験とか論理を全部集めたとしても歯が立たないと思った。表現のバックグラウンドを地固めする必要があった。表向きは家族のため、長男だから家族のためといっているが、写真のためでもあった。その2つの理由ですね。

山崎――もともと関西、大阪で生まれ育って京都で学生時代を送り、いろんな映画の現場に出入りしたり、映画を作ったりしていたけど、京都で作ることに飽き足らなかった。杉浦さんが地固めと言われましたが、日々食べているもの、口に入れているものがどういう状態であり、いろんな野菜がどんな状態であり、どういう販路で食卓に来るのか、どんな肥料が使われているのか全くわからないことに気づいて、それは何かを表現する以前の問題だと思った。祖母が真庭で一人暮らしをしていたこともあって、農業をしようと思い7年前に移住した。父親は大阪に居るので、Uターンではなく2世代かけてのUターンとなった。

井筒――愛知県岩倉市出身で、東京で国の自然エネルギーの政策作りなどのコンサルタントを経て、岡山には7年前に備前市のプロジェクトがきっかけで来た。コンサルタントというのは外から入ってきてその地域のために仕事をしてまた帰っていくという感じのたち位置。5年間ぐらいはコンサルタントの気持ちで仕事をしていたが、今は完全に地元の人間として。人間的なネットワーク、エネルギー資源もあるし、そういう専門性は持ちながら地元人としてここから発信もしている。もう一つ付け加えるなら、コンサルタントは木を切っていないのに木のエネルギーを語る。木を切ったことがないのに行政に対して言ってはいけないなと思った。だから、林業をやり始めたし、米作りもしている。そしたら言葉に説得力がつく。今は精神的に余裕そういう感覚です。

▼「地域」の中で生み出されるもの

杉浦――現代美術は学問だからコンテクスト（文脈）を理解しないと目の前の作品はわからない。作品を読解する経験値が必要。それを田舎の人に理解してもらおうっていうのは最初から思ってなかったので、現実的に仕事として成り立たない。だったら自分で安定的な収入を確保しようと。それは山で木を切るという肉体労働。仕事はきついけれど選んで正解だった。おかげで撮りたくない写真を撮らなくていいし、やりたくないことをやらなくていい（笑）。

歴史とか風土的なものを感じながら地域社会を撮ってはいるけれど、結局根本にあるものはセンチメンタルなんじゃないかと思う。人間は成長し続けるというけれども朽ちていく自由、衰退していく自由も選択肢としてあるし、そこに美を見出してきた世界的にも稀な美意識の歴史を我々はもっている。だから、一見ダメな（写真映えしない日常的）風景も結局はそれも「あり」なんじゃないかと肯定的に捉えられるんだと思う。

山崎――僕たちみたいに低予算でやっている団体は、勝手に誰かに上映してもらうというわけにはいかない。地域で生まれた映画を地域で見せたいという思いは、映画に関しては特にあるので、そこまでしないと映画は終わらないと。東京でそれこそ作りたくない映画を作るとか、東京のクルーがこっちに来て撮影し、東京に持って帰って上映だけ東京ですることになってしまう。地域で作って地域で見せるところまでしないと残らない。

目指していることの一つで、本来、芸術とか文化は、田植え歌というか、労働の疲れを癒したりする、歌ったりすることで疲れを癒すということころは目指しているところ。自分たちは労働から得た何かで表現することによって、こっちも癒される瞬間があると、僕は励みになっている。

井筒――僕は変えることがベストと思ってない。今僕が注目しているのは縄文時代。この時代のあり方がベストだと思う。縄文を取り入れて、何もないところからどういうふうにしたら今の僕たちの生活がベストなのだろうかと考えた時、縄文の人たちって、近くのものを取るとか、鹿やいのししをとって、どんぐりを拾って暮らしていた。それは環境問題とか言わなくたって、普通にそうしていた生活が確かにあったわけですから、それから学ぶことはある。

地元の人たちとは、必ず関係性が出てくる。なぜなら田んぼを借りているし、山に入っているから。僕らはいっさい土地を持っていないので、すべて地元の人たちにお願いしている。そして、山仕事や田んぼをやっている姿を地域の人に見てもらう。あいつらいるなっていう、いるっていうことが大切。そうするといろいろなサポートをしてくれる。行政に対して報告書を出しているだけだと地元の人には見えない。そういうわかりやすいことを継続的に見せてあげることが大事なことだと思う。

▼地域で生きる可能性と未来

杉浦――自分の作品が地元の多くの人に受け入れられればそれに越したことないと思うが、それが別に目的ではないので、今のペースのまま静かに制作を続けたいと思っている。穏やかな環境の中で静かに制作をしたい。それが出来るのが地方のメリット。現代美術作品の制作にとって必ずしも恵まれているとはいえない環境の中で生じる精神的な負荷は、作品を作ることによって解放されるので、いまのままで問題ないと思っている。

山崎――農家と映画、両方をやめたくない。続けていく中で、次は一揆を描こうと思っている。これがもしかして映画の最後になるかもしれないかという思いで作りたいなと思っていて、これの先に次に映画があるかどうかがわからない、見えない。とりあえず一揆を起こすように、一揆の映画を作るのを1年2年3年ぐらい、やろうと思う。

井筒――最近、上山でタップダンスを始めた。タップダンサーで世界を回っていた人が上山に移住を決めて、英田上山逐歩団を作った。この巻き込み方が半端じゃない。ブロードウエイで、みんなで踊ろうみたいな大きな野望をもっていて（笑）。僕が山とかエネルギーで巻き込んできた力が、すごくしょぼく感じるぐらいにタップ団はすごい。何がいいたいかというと、そういう文化的なことはみんな好きなんだなと。僕は、すべての表現している人よりも表現力は低い。ただ、表現することで、むしろ皆さんのリアルな社会において、新しい創造をするってことにつながるような価値を持つと思った。僕のレンジに表現するとかはなかった。

★フォーラムを終えて――山川隆之

きっかけは三者三様だが、たどり着いた地域でそれぞれ自分のめざすものを大切にしながら活動を続けている3人の話を聞きながら、地域に根ざすことで生まれる「文化」があることを、改めて確信した。生半可ではないエネルギーは必要だが、30代という可能性に充ちた彼らが進んでいく道は、周囲のオトナたちをも巻き込み、新しい世代をひきつける魅力にあふれている。参加者たちにいい刺激を与えてくれたのではないだろうか。

杉浦慶太 ――― Keita Sugiura
写真作家

1980年岡山県生まれ。津山市在住。
2008年「GEISAI#11」銅賞、「I氏賞」大賞
2009年「Daydream」(MaxProtetchGallery ／ニューヨーク)
2010年福武文化奨励賞、「inkjet」(CASHI ／東京)、
「杉浦慶太展―農村の意匠」(奈義町現代美術館／岡山)

山崎樹一郎 ――― Juichiro Yamasaki
cine/maniwa 代表

1978年生まれ。2007年にcine/maniwaを設立し、真庭地域で上映会活動を開始。2012年第13回岡山芸術文化賞グランプリ。2作目となる「ひかりのおと」で平成23年第24回東京国際映画祭日本映画・ある視点部門正式出品、平成24年第41回ロッテルダム国際映画祭Blight Future部門正式出品、第7回大阪アジアン映画祭特別招待作品部門正式出品作品。2012年福武文化奨励賞。

井筒耕平 ――― Kohei Izutsu
美作市地域おこし協力隊

1975年愛知県出身。美作市在住。名古屋大学大学院環境学研究科へ入学。木質バイオマスによるエネルギー自給モデルについて修士論文を執筆。2005年に岡山県備前市のプロジェクトへ参加し、ペレットストーブ、太陽光発電、省エネ事業を担当。2011年美作市地域おこし協力隊に参加。2012年秋に村楽エナジー株式会社を設立し、代表取締役兼CEOに就任。

山川隆之 ――― Takayuki Yamakawa
編集者、吉備人出版代表

1955年岡山市生まれ。三重大学農学部卒業。生活情報紙編集長を経て95年に株式会社吉備人を設立。「のれん越しに笑顔がのぞく」「愛だ!上山棚田団―限界集落なんて言わせない!」などの編集を担当。岡山ペンクラブ会員、NPO法人アートファーム理事。2012年福武文化奨励賞。

寄稿

私のオーストラリア留学

権田美里

TAFE NSW－North Sydney Institute
Northern Beaches College, Accountingコース在学中

私は2012年に岡山県立津山商業高等学校を卒業し、4月からGCA（グローバルキャリアアカデミー）の支援を受けながら、シドニーにあるCrows Nest Collegeの語学学校で英語力を身に付け、この2月からはNorthern Beaches Collegeで Accounting（会計学）を学んでいます。

私のオーストラリア留学生活は、渡豪する前に想像していたような華やかなものではありません。しかし、私はいい出会いをし、オーストラリアで楽しく生活をしています。

昨年4月に渡豪してからの9か月間はホームステイをしていました。ホストファミリーは私に本当の家族のように接してくれて、毎日家に帰るのが楽しみでした。昨年末に語学学校を卒業したのをきっかけに、また新たな挑戦をしたいと思い、今はシェアハウスに移っていますが、今でもホストファミリーとはたびたび会ったりメールをしたり、お互いのNewsを交換し合っています。今のシェアハウスもとてもいいオーナーとシェアメイトで、一緒にBBQをするなど、英語の勉強になるとてもいい環境で過ごしています。

語学学校で友達になった違う国の友だちとも、今はTAFEのCollegeが別々になってしまいましたが、一緒にご飯を食べに行ったり、みんなのコースのことを話したり聞いたり、将来の話をしたりと、楽しい時間を過ごしています。国が違えば、やはり考え方が違ってきますが、それもまたいい勉強になって私は好きです。

オーストラリアで過ごすことで、日本にいるだけでは見つけられないことも見つけることができました。日本では当たり前だったことが、オーストラリアでは全く当たり前ではないし、逆にオーストラリアで当たり前のことが日本では当たり前ではないことなど、旅行などでは決して発見できないことだと思います。私はこのように長期で勉強ができていることに感謝しこれからもがんばっていきたいと思います。

将来は、TAFEで単位を取得し、一度は英語圏での会計の仕事をしてみたいです。また日本でも会計の勉強をして簿記の資格を持っているので、日本でもオーストラリアで勉強した会計の知識が生かせるような仕事に就きたいです。

TAFE NSW
https://www.tafensw.edu.au/

ベネッセグローバルキャリアアカデミー
http://www.gc-cademy.com/

福武教育文化振興財団 平成25年度の主な事業

平成25年3月9日、直島に於いて理事会・評議員会を開催した。
初めに福武總一郎理事長（写真）から「公益財団法人としての運営体制、事業内容の検討を行い、公益の最大化を図るため、事業の精査と効率化に努めなければならない。一方で、時代に応じた課題解決型の方向に導くべく検討していく必要があり、特に岡山県の児童生徒の学力低下問題について柔軟に対応し存在感のある財団として支援をしていきたい。」とあいさつがあった。
平成25年度事業計画が次のとおり決定した。

教育文化活動支援事業

Ⅰ　表彰事業

岡山県の教育・文化の振興に大きく貢献した個人・団体、または今後の活動が期待される個人・団体

■福武哲彦教育賞・谷口澄夫教育奨励賞
■福武文化賞・福武文化奨励賞

Ⅱ　助成事業

教育関連助成

◎教育研究助成（公募）
今年度は「学力向上を図る研究・実践活動」と「グローバル意識を持つ子どもの育成」に特化し、岡山県の児童生徒の学力レベル向上と国際化を目指すことを目的とする教育研究及び実践活動に助成

◎研究大会助成（公募）
教育研究大会や教育的諸行事等の開催に対して助成

◎特定教育助成
今日的教育課題について実践的かつ先進的な研究を行っている教育団体等に対して助成
今年度から「学力向上モデル地区助成」を新設する。

◎学力・人間力育成推進事業助成
学校の教育力・教師の力量並びに地域の教育力の強化を通じて児童・生徒の学力・人間力の豊かな育成を図る研究・実践事業に対して助成

文化関連助成

◎文化活動助成（公募）
文化芸術による地域の活性化を目指す活動に助成

◎特定文化助成
主要文化団体の活動に助成。今年度から「出石・国吉プロジェクト助成」を新設

◎指定文化財保全助成
国、県等が指定した文化財を保全するために緊急に要する費用を助成

◎瀬戸内文化育成助成
瀬戸内文化の育成、創出のために必要なプロジェクトに対して助成

Ⅲ　研修会等開催事業

◎小学校教員英語研修
小学校教員の英会話能力を向上させるために集中的な研修を、テレビ会議システムで行う。

◎研修会・講演会開催
教育文化の振興のための研修会、講演会を行う。文化フォーラムを継続するほか、
瀬戸内国際芸術祭 2013 に向けた取り組みを行う。

◎その他、調査研究事業、「犬島 海の劇場」事業、広報事業など

国際的人材育成事業

Ⅰ　海外教育調査研究・研修事業

教師と若者（主として高校生）をオーストラリアに派遣し、先進的な教育制度や留学生支援体制を体感させて、若者が国際化社会の中で世界に目を広げ、自らスキルを高めるための選択肢を提示する。

Ⅱ　日中青年交流研修事業

岡山県と中国の高校生が相互に訪問交流し、学校授業や行事、ホームステイ等を通じて相互理解と友好を深める事業に対して助成

Cover Photograph

「書を捨てよ、町へ出よう」と彼は言った。　杉浦慶太

私はいつから旅をしなくなったのだろう。
かつて友であった、旅の中で感じる期待と不安が入り混じる“風の匂い”をもう思い出すことができません。
先日、私は宇野の町を初めて歩いてきました。きっかけは今回の瀬戸内国際芸術祭の会場に宇野が加わったからです。
お肉屋さんの甘く懐かしいコロッケ。老舗和菓子店のたっぷりとあんが詰まったどら焼き。注文を受けてから捌く絶品のうな重。小さなギャラリーで見た芸術品のような布製品の美しさ……。
見知らぬ土地で不意に出会うささやかな感動。今思えば、それは私にとって平坦な日常を少しだけ離れた旅のようでした。
かつて寺山修司は「書を捨てよ、町へ出よう」といいました。それは表層の知識だけでは決して世界を知ることなどできないという彼なりの矜持であったに違いありません。
パソコンやケータイの画面からでは伝えられない感動が旅にはあります。それを知るには自分が五感で体感するしかないのです。そしてそれはきっと友となり、人生に寄り添ってくれるはずです。
瀬戸内国際芸術祭が開幕しました。あなたも出掛けてみませんか、忘れかけていた“風の匂い”をもう一度思い出すために。

※「書を捨てよ、町へ出よう」（寺山修司著　芳賀書店発行　1967）

すぎうらけいた／写真家　1980年岡山県生まれ。津山市在住。2008年「GEISAI #11」銅賞、「1氏賞」大賞／ 2009年「Daydream」（MaxProtetch Gallery ／ニューヨーク）／ 2010年福武文化奨励賞、「ink jet」（CASHI ／東京）、「杉浦慶太展―農村の意匠―」（奈義町現代美術館／岡山）

Editor's Comments

3月20日、いよいよ瀬戸内国際芸術祭2013が開幕しました。ぐずつき気味のお天気を吹き飛ばすような高松でのオープニングイベントでは、約1,000人の国内外の参列者を前に、福武総合プロデューサーから「アートの力で島々に活力をとりもどし、瀬戸内海を世界の希望の海に」と力強いあいさつがあり、盛大な幕開けとなりました。
正式な会場地となった宇野港では「たまの☆おもてなし推進委員会」等による開会行事が、また犬島でも地元中高生のブラスバンドや婦人会の踊りで来場者をお迎えです。当財団は実行委員会のメンバーとして岡山県側の連絡調整の役割を担っていますが、前回2010と異なっていたのは、多くの関係者の期待感と来場者へのおもてなしの準備だったように思えます。みんなで地元の盛り上がりを応援したいものです。
岡山は世界に誇るべき瀬戸内海の中央部に位置しながら、今までは真剣に海と向き合い、地域資源として活かそうとする取り組みが少なかったように感じられます。長い時をかけてアートの島との世界的評価を受け訪問者の絶えない直島、廃棄物の島とのイメージを払しょくしつつある豊島、100年前の廃墟が生まれ変わった犬島など、アートの力を示すモデルがここにあります。
芸術祭は始まったばかり。4月21日までの「春」そして「夏」「秋」と続きます。
心地よい海風を感じながら、アート作品と島の人々に出会いに行きましょう。(N)

季刊　不易　F U E K I　vol.50　2013.4.15

編集・発行：
公益財団法人　福武教育文化振興財団
〒700-0807　岡山市北区南方3-7-17
株式会社ベネッセコーポレーション本社3F
TEL 086-221-5254　FAX 086-232-3190
URL http://www.fukutake.or.jp/
E-mail eczaidan@fukutake.or.jp

制作：
株式会社 吉備人
デザイン：
田中雄一郎(QUA DESIGN style)
印刷：
広和印刷株式会社

人づくり、地域づくりを応援します
公益財団法人　福武教育文化振興財団
FUKUTAKE EDUCATION AND CULTURE FOUNDATION